

第35回
西洋社会科学古典資料講習会

2015年11月18日（水）～20日（金）

一橋大学社会科学古典資料センター

講 義 日 程

第 1 日 11月18日 (水)

	8:50～ 9:10	オリエンテーション			
①	9:10～10:40	書誌学 (I) 記述書誌を“読む”面白さ：図書館員のための書誌学入門	武者小路 信和 大東文化大学文学部 准教授	1	
②	10:55～12:25	書誌学 (I) 記述書誌を“読む”面白さ：図書館員のための書誌学入門	武者小路 信和 大東文化大学文学部 准教授		
③	13:45～15:15	古典研究 (I) 論争から見るドイツ社会思想史：18 世紀ドイツの 3 つの論争から「言論の自由」を考える	佐山 圭司 北海道教育大学准教授	6	
④	15:30～17:00	保存・修復 (I) 環境と材料：紙資料の保存	増田 勝彦 昭和女子大学非常勤 講師	9	

懇親会 (17:20-19:20) : 希望者のみ

第2日 11月19日(木)

- | | | | | |
|---|-------------|--|-----------------------------------|----|
| ① | 9:10～10:40 | 古典研究(Ⅱ)
フランス啓蒙思想をめぐって | 山崎 耕一
一橋大学社会科学古典
資料センター特任教授 | 16 |
| ② | 10:55～12:25 | 書誌学(Ⅱ)
東北大学貴重図書発掘：漱石、ゼッケル、
ケーベル、チーテルマン文庫 | 小川 知幸
東北大学学術資源研
究公開センター助教 | 18 |
| ③ | 13:45～15:15 | 保存・修復(Ⅱ)
西洋古典資料の調査票について | 岡本 幸治
製本家・書籍修復家 | 22 |
| ④ | 15:30～17:00 | 一橋大学社会科学古典資料センター見学 | | |

第3日 11月20日(金)

一橋大学附属図書館見学 (9:00～ 9:45)：希望者のみ

- | | | | | |
|---|-------------|--|------------------------------------|----|
| ① | 10:00～11:30 | 古典研究(Ⅲ)
思想史研究の方法：18世紀スコットラン
ド啓蒙研究を例に | 福田 名津子
一橋大学附属図書館
研究開発室専門助手 | 26 |
| ② | 12:50～14:20 | 書誌学(Ⅱ)
西洋古典資料の目録作成 | 床井 啓太郎
一橋大学社会科学古典
資料センター専門助手 | 31 |
| ③ | 14:35～16:05 | 書誌学(Ⅲ)
目録作成実習 | 福島 知己
一橋大学社会科学古典
資料センター専門助手 | |
| | 16:20～16:40 | 修了式 | | |

※第3日のみ各時限の開始時間が異なりますのでご注意ください。

記述書誌を“読む”面白さ

— 図書館員のための書誌学入門 —

武者小路 信和

(大東文化大学文学部准教授)

世界各国の主要な国立図書館・学術図書館などを中心として、古典資料のデジタル画像を web 上で公開するプロジェクトがさかんに進められています。とくに IT 企業の主導・支援によって、この動きは以前に想像されていたよりも急速に進行しています。所蔵する図書館へわざわざ出向かなくても、インターネットに接続できれば世界中のどこからでも、その古典資料にアクセスでき、本文を読むことができることは非常に大きな魅力です。

では、こうした動きが加速化していくなかで、各図書館が古典資料を所蔵することの意義、あるいは新たに古典資料を購入することの意義は、どこにあるのでしょうか？ インターネットで〈本文〉を読むことができるのであれば、各図書館が古典資料の「現物」を収集し、整理し、サービスし、保存していく必要はなく、逆にお金の無駄だということになってしまうのでしょうか？

詳しい説明は実際に講義において行いますが、とくに古典資料の場合、その造本行程に起因して、同時に印刷・出版された「同じ本」同士の間でも本文の異同が存在する可能性があります。したがって、同じ本の複本を、単純に重複しているから無駄であると判断することはできないし、たとえその本の画像が web 上で公開されているとしても、それで充分である・他のコピーが必要ないということではないのです。

たとえば、Shakespeare の最初の全集 (London 1623) [First Folio (最初の二折り本) と呼ばれる] に関しては、C. Hinman が、自身で開発した Collator (校合機) を用いて、Folger Shakespeare Library に所蔵されている First Folio (のなかから) 約 30 点を子細に比較・照合したことで、本文の異同の解明が大いに進みました。複本は、同じ場所で現物同士での比較・照合を可能にする点でも決して無駄なものではありません。なお、A. J. West. The Shakespeare First Folio. Vol.2: A New Worldwide Census of First Folios (Oxford University Press, 2003)によれば、Folger Shakespeare Library

は First Folio を 82 点（現存するものの 1/3 以上）所蔵しており、次いで明星大学の 11 点が続きます。

本の魅力は、中身を読む「読書」の面白さだけにあるのではなく、書物の「モノ」としての側面にもあります。とくに古典資料は、一冊一冊が「個性」をもち、なかなか渋い魅力をもっています。

たとえば、David Pearson はその著書 *Books as History: The Importance of Books Beyond Their Texts* (London: British Library, 2008; rev. ed. 2011 : 邦訳『本：その歴史と未来』（ミュージアム図書 2011））において、書物にとって「本文」だけが重要なのではなく、「モノ」としての書物はそれぞれが歴史的に持つ個性（たとえばブックデザイン、来歴・書き入れ、製本など）を持っており、その歴史的な個性の重要性・魅力を、豊富な図版を使って具体的に紹介しています。（読み通すのが大変であれば、図版の解説部分だけを読んでも、面白い本です。）この本でも紹介されていますが、「本当にコペルニクスの著作は読まれなかったのか」を調べるために、科学史の研究者が約 30 年かけて世界中に残っているコペルニクス『天球の回転について』（1543）の初版と第 2 版約 600 冊の現物調査（とくに書き入れの調査）を行いました[Gingerich, Owen. *An Annotated Census of Copernicus' De Revolutionibus* (Nuremberg, 1543 en Basel, 1566). (Leiden: Brill, 2002)]. この調査を行ったオーウェン・ギンガリッチの『誰も読まなかったコペルニクス：科学革命をもたらした本をめぐる書誌学的冒険』（早川書房 2005）では、できるだけ多くの現存する資料に直接あたることによって、初めて見えてきたことが生き生きと語られています。このような現存する同一本・同一タイプの資料にできるだけ多く直接あたって調査する研究方法は、数は少なくとも、増えてきています。こうした学術研究を支えるためにも、各図書館が現物の古典資料をこれからも所蔵していくことが重要です。

現在のようなインターネット／デジタル時代に古典資料を扱う図書館員（古書籍業者を含む）にとって、古典資料がもつ個性、つまり本文（テキスト）、製本、来歴(provenance)、書き入れなど、印刷・出版・造本・所有・読書・利用に関わる歴史的「個性」を見抜くちからが、特に求められているように思われます。そして歴史的「個性」を見抜くためには、書誌学の基本的な知識が不可欠です。

書誌学(bibliography)という用語は、書誌の編纂およびその活動を意味する列举（分類）書誌学(enumerative bibliography)・体系書誌学(systematic bibliography)を指す場合と、「モノ」としての書物の研究あるいは文献伝達の研究(the science of the

transmission of literary documents)を意味する分析書誌学(analytical bibliography)を指す場合とがあります。ここでは後者、つまり「原稿や植字工の植字癖の研究・分析を含む造本工程の研究を通して正しい本文を解明しようとする試み」(山下浩)としての書誌学を対象にしています。

書誌学の魅力の一つは、紙、活字、印刷面、造本など、「モノ」としての書物に残された具体的な物理的証拠に基づいて、その書物の本文、印刷・造本工程や出版にまつわる疑問を解明する「謎解き」の面白さにあります。といっても、書誌学の調査を行うためには、ある著作の同じ本あるいは版・刷・発行の違う本をできるだけ多く比較照合する必要があります。さらに著者や出版者の手紙・記録などの史料・資料を見つけ読み込んでいくことも必要です。購入を検討する場合や目録をとる場合など、図書館業務のなかで古典資料を扱う図書館員にとって、こうした「謎を解く」ためにそうそう時間や手間をかけてもいられません。そのため、書誌学の研究成果(書誌類・論文など)を上手に利用する必要があります。いわば、書誌学者を実際に謎を解く探偵とみなせば、図書館員は、実際の本と照合しながら書誌類・論文を読むことによって、推理小説を読むように謎解きのエッセンスを楽しめばよい、といえるかもしれません。(図書館員が実際の謎解きに取り組むことを否定しているわけではなく、積極的に謎解きに参加して貰いたいと思っています。)

今回は、(書誌学の研究成果を活用するために必要な)書誌学の入門的な知識と共に、書誌学の魅力・面白さを紹介したいと思います。

- 1 古典資料をオリジナルで所蔵することの重要性
- 2 書誌学の研究成果を上手に利用する
- 3 図書館員のための書誌学の基礎(Ⅰ):本の仕立て
- 4 図書館員のための書誌学の基礎(Ⅱ):記述書誌の読み方
- 5 図書館員のための書誌学の基礎(Ⅲ):印刷地の見分け方
- 6 書誌学調査のための科学機器
- 7 西洋古典資料とインターネット

といっても、講義時間の関係もあり、今回は主に「3 本の仕立て」と「4 記述書誌の読み方」を中心に上げる予定です。

「本の仕立て」(その本がどのような折り丁によって構成されているか)は、「モノ」としての書物を理解するうえでの出発点であり、「記述書誌の読み方」は、(理想本について記録した)記述書誌*と比較・照合することによって、その本が

- ①どんな本であるのか(著者、出版者、出版年など)

②どの版(edition)、刷(impression)、発行(issue)に属するのか(他のコピーとの関係)

③完全なコピーであるのか(本来あるはずの紙葉、図版などを欠いていないか)

といったことが判るので、図書館で古典資料を購入したり、利用者にサービスをする際に役に立つでしょう。

*図書館の目録が、実際に眼の前にある一冊の本の書誌的事項などを記録したものであるのに対し、記述書誌(descriptive bibliography)は、理想本(ideal copy:市販された刷・発行の範囲内で、出版者が出版を意図した形の本を歴史的に検討して再構築した本)の書誌的事項などについて記録しています。

業務のなかで古典資料を同定するために記述書誌を利用する場合には、その資料に関わる記入・書誌記述を参照するだけで済むことも多いでしょう。でも機会があったら、記述書誌の序文などの解説部分にも目を通すことをお勧めします。記述書誌を“読む”ことで、その著作の成り立ちや印刷・出版の経緯、著者と出版者との(交流や諍い・いざこざを含む)関係などを知ることができだけでなく、そのような経緯や関係が「モノ」としての書物に具体化されていること、その結果「モノ」としての書物を記録した記述書誌の記入・書誌記述にも反映されていることが理解できるでしょう。

詳しい資料・参考文献リストは当日配布しますが、とりあえずの参考文献として以下のものを挙げておきます。

・雪嶋宏一『西洋古版本の手ほどき 基礎編』(明治大学リバティアカデミー 2011)

西洋書誌学の基本を知るうえで便利な日本語の文献。

・高野彰『洋書の話』増補版(丸善 1995)

記述書誌の読み方の基本を知るうえで便利な日本語の文献。

・G. Thomas Tanselle. *Bibliographical Analysis: A Historical Introduction*. (Cambridge University Press, 2009)

書誌学の動向・主要な研究を歴史的に解説したもので、文献案内としての機能も併せ持っており、書誌学の研究史および重要な研究成果を知るうえで非常に便利な本。

なお、同氏による基本文献の書誌 *Introduction to Bibliography* および *Introduction to Scholarly Editing* が、University of Virginia Rare Book School(RBS)のサイト <http://www.rarebookschool.org/tanselle/> から無料で入手できます。(ダウンロードして損はありません。)

・Marks in Books.(Cambridge, MA: Houghton Library, Harvard Univ., 1985)

Harvard 大学の貴重書図書館 Houghton Library が所蔵する、さまざまな「個性」をもった本が紹介されています。皆さんの図書館にもこのようなお宝が眠っているかも

しません。

- ・書物関係の用語事典として有名な Carter, John. ABC for Book Collectors. 8th ed. by N. Barker が、International League of Antiquarian Booksellers(ILAB)のサイト http://www.ilab.org/eng/documentation/29-abc_for_book_collectors.html から無料で入手できます。(ダウンロードして損はありません。)

本書(第六版)の邦訳:『西洋書誌学入門』(図書出版社 1994)(ビブリオフィル叢書)

- ・安形麻理『デジタル書物学事始め』(勉誠出版 2010)

最近注目をあびるようになった書誌学へのデジタル技術の応用の動向・具体例を知ろうえで有用な本です。樫村雅章『貴重書デジタルアーカイブの実践技法: HUMI プロジェクトの実例に学ぶ』(慶應義塾大学出版会 2010) も参考になります。

- ・シェイクスピアの最初の全集 First Folio(1623)の現存本の世界規模の所蔵調査については、Eric Rasmussen and Anthony James West, ed. The Shakespeare First Folios: A Descriptive Catalogue. (Palgrave Macmillan 2012)も出版されている。ここでは明星大学の所蔵点数は 12 点。

編者の一人であるエリック・ラスムッセンの『シェイクスピアを追え! 消えたファースト・フォリオ本の行方』(岩波書店 2014) が出版されている。

- ・紙の歴史については、従来の紙の歴史を扱った本と内容面で大きく異なるが、ローター・ミュラー『メディアとして紙の文化史』(東洋書林 2013) があり、興味深く読める。

- ・ウィリアム・ノエル、リヴィエル・ネッツ『解説 アルキメデス写本: 羊皮紙から甦った天才数学者』(光文社 2008) も、対象は印刷本ではなく写本ですが、面白く読め、お薦めです。

- ・書誌学・古典資料関連の web サイトの入り口としては、私のサイト「The Biblio Kids!」<http://www1.parkcity.ne.jp/bibkid> に「泰西古典資料 リンク」のページがあります。

論争から学ぶドイツ社会思想史

— 18 世紀ドイツの3つの論争から「言論の自由」を考える —

佐山圭司

(北海道教育大学准教授)

1. はじめに — 講義のねらい

18 世紀の最後の四半世紀に、ドイツでは宗教をめぐる 3 つの大きな論争が繰り広げられた。レッシングとルター派正統主義者たちとの「断片論争」、「スピノザ主義」をめぐるメンデルスゾーンとヤコービとの「汎神論論争」、匿名の告発とそれに応じた政府当局にたいしてフィヒテが反論した「無神論論争」である。本講義は、それぞれの論争が、いかなる問題をめぐって、どのように論争が展開され、最終的にどんな結末に至ったのかを概観することで、これらの論争の背景や意義を学ぶ。そして最後に、現代に生きる私たちが、これらの論争からどんな教訓を引き出すべきか考えてみる。

2. 宗教的真理とは何か — 啓蒙主義とルター派正統主義の闘い

「断片論争」は、劇作家のレッシングが、理神論者ヘルマン・ザムエル・ライマールスの遺稿を『無名氏の断片』として公表したことから始まった論争である。ブラウンシュヴァイク大公国のヴォルフエンビッテル図書館の司書に就任したレッシングは、宗教を攻撃しないという条件の下で、ブラウンシュヴァイク大公から検閲免除の特権を得て、図書館に埋もれている貴重な文献を次々と刊行する。これらともに彼は、ライマールスの娘エリーゼから委ねられていた遺稿を、あたかも図書館に埋もれていた文献であるかのように公表し始める。最初の穏健な部分は反響がなかったが、啓示を批判し聖書記述の矛盾を指摘する部分が公にされると、聖書にキリスト教の絶対的真理を見るルター派正統主義者が、批判を開始する。最初のうち批判は、『無名氏の断片』の著者ライマールスへ向けられていたが、ルター派正統主義の代弁者を自認するハンブルクのカタリーナ教会の主席牧師ゲッツェは、そもそも神を冒瀆する書物を編集・刊行したレッシングを槍玉に挙げる。かくして論争は、神学的問題から人格的批判へと移行し、ゲッツェは、ブラウンシュヴァイク大公に働きかけて、レッシングの検閲免除特権を剥奪させる。その後、レッシングの宗教に関する著作は検閲され、さらにブラウンシュヴァイク政府の

許可なしに彼はいかなる書物も出版できなくなる。これによりレッシングは、論争の場を「劇場」へと移し、『賢人ナータン』をもって論争を続行するのである。

3. レッシングの「スピノザ主義」——啓蒙主義と「反啓蒙主義者」と闘い

「汎神論論争」は、「レッシングはスピノザ主義者であった」というヤコービの「暴露」から始まる。メンデルスゾーンがレッシングにかんする著作を準備していると耳にしたヤコービは、晩年のレッシングを訪ねて哲学や宗教について語り合った際にレッシングが自らの「スピノザ主義」について語ったと、ライマールスの娘エリーゼを介してメンデルスゾーンに手紙で伝えるのである。宗教の違いを超えて固く結ばれた長年の親友でありながら、レッシングからそうした宗教的見解を聞いていなかったメンデルスゾーンは驚愕しつつも、「無神論者」とほとんど同じ響きをもつ「スピノザ主義者」という中傷から亡き友を救い出そう画策する。こうして緊迫したやりとりが始まり、ヤコービがたんなる素人の哲学愛好家ではなく、スピノザ哲学に通じた手練れであることを悟ったメンデルスゾーンは、ヤコービがレッシングの「スピノザ主義」を公の場で暴露する前に著作を刊行しようとする。それを知ったヤコービが、匿名でメンデルスゾーン宛書簡の公刊に踏み切るのだが、これが有名な『スピノザ書簡』である。その後、「汎神論論争」は、レッシングのスピノザ主義から、スピノザ哲学の性格づけをめぐる問題に発展し、メンデルスゾーン亡き後は、ヘルダーがスピノザ擁護のために参戦するのだが、これによりヤコービが弾劾したスピノザの評価がかえって高まり、「スピノザ・ルネサンス」につながるのである。

4. 匿名の告発——学問の自由をめぐる闘い

「無神論論争」の発端は、フィヒテとニートハンマーが編集する『哲学雑誌』に、フォルベルクの「宗教の概念の発展」とフィヒテの「神の世界統治に対する私たちの信仰の根拠について」が掲載され、これを批判する匿名の小冊子『フィヒテとフォルベルクの無神論にかんする父の息子に対する手紙』が流布したことによる。この小冊子は、フォルベルクが依拠するカントの批判哲学やカントを発展させたフィヒテを批判しつつ、学生を危険な「批判哲学」から守るために、フィヒテらが大学で教えることを禁じるよう求めるものであった。この匿名の筆者は、レッシングの友人であったフリードリヒ・ニコライやレッシングが遺稿を公刊したライマールスらの啓蒙主義的神学を支持しており、ニコライに近い啓蒙主義グループに属していたと推測される。この小冊子に対して、「批判哲学」を好ましく思っていなかったドレスデンの宗教局が反応し、ザクセン大公に『哲学雑誌』の没収を求める文書を提出した。ザクセン大公は、ライプツィヒ大学とヴィッテンベルク大学で『哲学雑誌』を没収し、さらにフィヒテが教えるイエーナ

大学を管轄する諸領邦や他国政府に論文の著者と出版社を厳重に処罰するよう要請した。フィヒテは、ヴァイマル政府に弁明する前に、編者のニートハンマー、著者のフォルベルク、さらに出版者ガブラーおよびコッタと連名で『公衆に訴える』という文書を発表し世論に訴えるが、これにより、問題を穏便に処理しようと考えていたヴァイマル政府も解決に積極的に乗り出さざるを得なくなり、フィヒテは解雇されるのである。イエーナを去ったフィヒテは、フリードリヒ・シュレーゲルを頼ってベルリンに移り、新設されたベルリン大学で教鞭をとることになる。

5. おわりに — 過去の論争から考える言論・学問の自由と倫理

18 世紀末ドイツの思想界を賑わした 3 つの論争から、現代における私たちは多くのことを学ぶことができる。真理を追究することが、大学をはじめとする研究機関の最終的な目的であるとすれば、外部から制限や強制を課されることなしに、学び、考え、討議し、発信する自由こそが、その前提条件になると思われる。『無名氏の断片』の公表によって、社会の支配的な考え方に疑問を呈し、人々に再考を促そうとしたレッシングに対して、ゲッツェは、公的権力に訴えて検閲免除特権（出版の自由）を剥奪させた。「無神論論争」でも、フォルベルクやフィヒテを黙らせるために、公的権力が利用された。もし匿名の告発者が、本当に啓蒙主義者だったとすれば、「断片論争」でルター派正統主義がなしたことを、今度は啓蒙主義者自身が行ったことになる。論争は、互いに腹藏なく意見を交換する「言論の自由」があつてはじめて本当の意味で成り立つものだが、相手を負かすために言論以外の手段に訴えると、「言論の自由」自体が危険にさらされることを忘れてはいけない。これは、立場を問わず、あらゆる言論に言えることである。さらに、3 つの論争がいずれも、学問的な争いから人格的な誹謗中傷に堕してしまったことを考えると、論争の参加者には、高い倫理が求められているといえる。「スピノザ主義者」「無神論者」「理性の敵」「狂信者」といったレッテル張りが、論争当事者から「自由な思考」を奪ってしまったことにも注意したい。私たちの暮らす民主主義社会は、「言論および表現の自由」のうえに成り立つものである。この貴重な自由を維持するために、現代の大学図書館が果たすべき役割は何か、皆さんと一緒に考えてみたい。

環境と材料

— 紙資料の保存 —

増田勝彦

(昭和女子大学非常勤講師)

目次

1. 紙自身に内在する劣化要因
2. 環境に依存する劣化要因
3. 劣化予防対策の考え方と実施

1. 紙自身に内在する劣化要因

1-1. 碎木パルプ紙

リグニンの変色物質の転移

(本紙だけではなく周囲が茶褐色になる)

〈対策〉→包装用紙製品は中性紙とする(袋、包装紙、箱の紙、板紙)

1-2. 酸性サイジング処理紙 * 補足-1 を参照

1-2-1. 酸性物質(明礬(カリ明礬)、硫酸アルミニウムなど)

- ① セルロースを加水分解し、結晶化を促す
- ② 紙への添加物として

②-1 明礬

：中国の表具師は糊に明礬を入れる(明時代の書籍の劣化)

* 芥子園画伝(1701)：絹の場合 膠 1.5%、明礬 0.6%

：日本画家は、膠に明礬を混ぜてドーサとし、絹、紙に塗布する

* 狩野派の法：紙の場合 膠 2.1%、明礬 1%

* 本間良助「日本画を描く人のための秘伝集」昭和8年5月、厚生閣書店

：西洋の15-16世紀の紙でも明礬は膠と共に使われていた

* マイエンヌの手記(1631)：

紙に水3ガロン、膠1ポンド、明礬2.5ポンド(水に対して膠3.3%、明礬8.3%)

* 森田恒之「画材の博物誌」昭和61年6月、中央公論美術出版

②-2 硫酸アルミニウム

：木材パルプ紙のしみ止め用ロジンの繊維への定着剤として添加される

〈対策〉→酸性度の測定

湿式 中性紙チェックペン、pH メータ

乾式 小谷尚子「非破壊方法による書籍資料の酸性度乾式測定方法
の検討」（第 28 回文化財保存修復学会大会、2006）

→アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置

炭酸カルシウム（ CaCO_3 ），重炭酸マグネシウム（ MgHCO_3 ）

＊（「防ぐ技術・治す技術－紙資料保存マニュアル」日本図書館協会、2005、より抜粋編集）

但し、明礬添加濃度が低い場合は、劣化速度は遅い。

→「和紙の劣化に対する明礬の影響」古文化財の科学 32, pp. 78-75

→「白色顔料による紙の劣化抑制」古文化財の科学 32, pp. 70-77

DAE 法によるトリエタノールアミンの残留処置

日本ファイリングによる事業化

1-2-2. 触媒（金属イオン）

① 酸化反応を促進する（インクに含まれる鉄、付着した錆、顔料の緑青）

〈対策〉フィチン酸塩処理の効果が認められる

② 黄土に含まれる鉄は損傷を与えない

〈対策〉→酸性を緩和する処置

1-3. 保存・修復材料

① セロテープ類による汚損・変形

〈対策〉→有機溶剤による除去

② 漂白剤（漂白中、残留漂白剤による）

〈対策〉→外観の向上を図るだけの漂白を避ける

→見難い文字を見易くさせるときのみ行なう

→修復家と討議

版画などでは光漂白(日光、蛍光灯)を処置することがある。

2. 環境に依存する劣化要因

2-1. 生物環境

虫害とカビ害（温度、湿度が高いと発生しやすい）が主だが、小動物による被害

も可能性有り。

〈対策〉 燻蒸、IPM

* 補足-2 を参照

2-1-1. 虫害

2-1-2. 黴害

(黴の生育範囲)

① 褐色斑点 (フォクシング) → 乾性の黴

② 黒色・赤色・青色の黴 → 湿性の黴

〈対策〉 → 保存環境の制御、集中豪雨・配管事故による漏水

→ 普通の条件では、風通しを確保すれば過度の湿度は避けられる

→ 防水性の箱の中に一度水気が入ると乾燥し難くなる傾向がある

2-2. 生物以外の環境

2-2-1. 温度と湿度

① 温度と湿度が高いと、化学反応速度が増す

② 含水率が低いと紙は硬くなり、折曲げに弱くなる (過乾燥)

③ 温度湿度の変化による紙の伸縮—含水率が環境相対湿度により変化

④ 温度湿度の変化が急激な場合の本などの変形

〈対策〉 → 書庫・収蔵庫の温度湿度管理

設計による省エネ型収蔵庫、

温度湿度調節機器の設置、特に除湿器の設置

→ 木や紙、土壁や漆喰壁も湿度調整機能を持つ

→ 相対湿度と絶対湿度を理解する。調湿剤の含水量。

環境の温度と湿度の条件が悪いと、図書の変形や劣化の促進の他に、カビの発生、虫の侵入を招く。カビ発生などの問題点を把握するためにも、測定と記録が同時に出来る計測器を複数箇書庫に設置して年間の記録をすることが勧められる。

夏季に高温となる最上階や西日が直接当たる書庫などは、専門業者による断熱工事が必要である。

湿度については、絶対湿度 (単位体積あたりの空気中の水蒸気量 g/m^3) と相対湿度 (温度によって大きく変化する空気の飽和水蒸気量と絶対湿度との比%) を理解する事は、現場の状況判断に有効である。

通常、湿度と表記されるときは相対湿度を表している。

$$\text{絶対湿度 (AH) } g/m^3 = \frac{\text{水分量 (g)}}{\text{体積 (m}^3\text{)}}$$

$$\text{相対湿度(RH) \%} = \frac{\text{絶対湿度 (g/m}^3\text{)}}{\text{飽和水蒸気量 (g/m}^3\text{)}}$$

* 「図書館・文書館における環境管理」シリーズ本を残す 8, 稲葉政満、日本図書館協会

* 温度湿度の監視 商品名：おんどとり(温度、湿度測定とデータ保存)

2-2-2. 汚染空気

a) 環境大気中の酸素・酸化硫黄・酸化窒素・水分等外部からの物質による化学的作用

汚染大気から→亜硫酸ガス (SO₂) 硫酸になる可能性

窒素酸化物 (NO_x) 硝酸になる可能性

オゾン、酸素など

〈対策〉→アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置*補足-2を参照

炭酸カルシウム(CaCO₃), 重炭酸マグネシウム(MgHCO₃)

DAE 法によるトリエタノールアミンの残留処置

→アルカリ性物質を含む紙で包む

〈対策〉→収納箱によるシェルター カイルラッパー他

→「容器に入れる—紙資料のための保存技術」、図書館協会

→中性紙によるガス吸着

「挿入法による中性紙の見直し」

[第15回資料保存協議会セミナー講演記録]平成14年10月

アルカリ性紙と長期間密着接触すると酸性紙の変色が大きくなる可能性。

* Masamitsu Inaba et al, 'Insertion-Accelerated Aging Test of Paper for Conservation: Increase in Discolouration of Acid and Alkaline Paper Interface' IIC, Baltimore 2002, pp. 104-107

b) 環境材料から放出される物質による

b-1. 新しい木材から放出される樹脂→桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

〈対策〉→内装木材の場合、ハترون紙、調湿紙などの被覆でも樹脂吸着に効果
樹脂の少ない材を使用する（桐、杉の白太など）

b-2. アルカリ性物質

① 染料を変色させる→浮世絵

② 写真の乳剤に影響

③ 絹を劣化させる

④ アマニ油（油絵の溶き油）硬化膜を褐色化。

打ち立てコンクリートから放出されるアルカリ性物質など

〈対策〉→コンクリートの枯らしに時間掛ける、除湿機の連続運転、包装用紙で壁面を覆う

アルカリ性が極めて高い紙（残留木灰を多く含む和紙）に包む危険性

〈対策〉→中性の紙に包む

中性紙について

硫酸アルミニウム含有中性紙

＊中野修「中性紙の評価法とこれからの課題」資料保存協議会第 1 回セミナー (2000)

坪倉早智子他「挿入法による紙劣化試験(IV)-硫酸アルミニウム成分の紙の劣化への影響-」文化財保存修復学会誌 Vol. 55、2010 年 3 月

2-2-3. 紫外線その他の光

a) 光（一般的には、照明が明るいと温度も上がる。）

① 可視光線、紫外線 日に曝された紙が変色する（白くなる、茶褐色になる）

〈対策〉→紫外線除去フィルターの使用

→光量の制限 暗ければ長時間、明るければ短時間

$50\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 200 \text{ 日} = 100\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 100 \text{ 日} = 80,000\text{Lux} / \text{年}$

（ギャリー・トムソン著、「博物館の環境管理」に記されている例）

博物館・美術館における展示照明の推奨照度（村上隆「文化財のための保存科学入門」）

資料	ICOM (1977) 推奨値	IESNA (1987) 推奨値	照明学会 (1999) 推奨値
光に非常に敏感な資料 (1)	50lx できれば低い方がよい (色温度約 2,900K)	50lx	50lx (1 日 8 時間、年 300 日で積算照度 120,000lx/h)
光に比較的敏感な資料 (2)	150~180lx (色温度約 4,000K)	75lx (1 日 8 時間、年 300 日で積算照度 180,000lx/h)	150lx (1 日 8 時間、年 300 日で積算照度 360,000lx/h)
光に敏感ではない資料 (3)	特に制限なし ただし 300lx を超えた照明を行う必要はほとんどない (色温度約 4,000~6,500K)	特に制限なし 実際には展示照明効果と輻射熱を考慮する必要がある	500lx

ICOM: 国際博物館会議

IESNA: 北米照明学会

(1) 染織品・衣装・死°ストリー・水彩画・日本画・素描・手写本・切手・印刷物・壁紙・染色した皮革製品・自然史関係標本

(2) 油彩画・テンペラ画・フレスコ画・皮革製品・骨角・象牙・木製品・漆器

(3) 金属・ガラス・陶磁器・宝石・エナメル・ステンドグラス

lx: ルクス、照度 K: ケルビン、色温度

2-2-4.用途に応じた加工・使用による汚染、変質、疲労破壊

① 書の縦位置保管、取扱による表面の擦れ・ページの破れ

〈対策〉→現状では、収納箱、帙、ラッパーで保管

注意深く丁寧な取扱

② 閲覧による紙の疲労

〈対策〉→調査・研究時だけの保護策

2-3. 収蔵用材

2-3-1. 砕木パルプ紙に含まれるリグニンの変色と変色物質の転移

(本紙だけではなく周囲が茶褐色になる)

〈対策〉→包装用紙製品は中性紙とする(袋、包装紙、箱の紙、板紙)

2-3-2. 新しい木材から放出される樹脂→絵などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

〈対策〉→内装木材の場合は、ハトロン紙などの被覆でも樹脂吸着に効果

樹脂の少ない材を使用する(桐、杉の白太など)

→中性紙によるガス吸着

*「挿入法による中性紙の見直し」[第15回資料保存協議会セミナー講演記録]

平成14年10月

2-3-3. アルカリ性が極めて高い紙(残留木灰を多く含む和紙)に包む危険性

〈対策〉→中性の紙に包む

*株式会社TTトレーディング <http://www.tokushu-papertrade.jp/>

2-3-4. 災害

補足-3を参照

① 水害(水害を受ける可能性は予想以上に高い)

3. 保存修復処置

補足-4を参照

a. 裏打ちと補修

b. 漉嵌め法

c. ペーパースプリット

d. 微小点接着法(Micro-dot adhering)

4. 劣化予防対策の考え方と実施

「繊維の寿命」「紙の寿命」と「紙を素材とした文化財(書籍など)の寿命」

修復の考え方

損傷を受けた原因は除去できるか。

本来の姿、装丁を尊重しているか。

乱暴な取扱にも耐える強さまで修復する必要があるか。

- * 図書館・文書館における環境管理（シリーズ本を残す8）稲葉政満著 2001.5
- * IFLA 図書館資料の予防的保存対策の原則（シリーズ本を残す9）エドワード・P.ア
ドcock編、国立国会図書館訳 日本図書館協会資料保存委員会編集企画 2003.7
- * 「容器に入れる一紙資料のための保存技術」（シリーズ本を残す3）相沢元子他、日
本図書館協会

フランス啓蒙思想をめぐる

山崎耕一

(一橋大学社会科学古典資料センター特任教授)

18 世紀のフランスといえば啓蒙思想と考えるのは、ほぼ常識といっていいだろうと思います。高校の世界史などでも、この時代はアンシアン=レジームと言われ、絶対王政のもとで国王政府とカトリック教会が手を結び、政治と思想信条の両面において個人の自由を抑圧していたとされます。それに対して、啓蒙思想家と呼ばれる一群の人々が現れ、政治・社会・宗教などさまざまな面での不合理を指摘・批判し、社会の改革と個人の自由の実現を呼びかけました。こうして展開された、いわゆる啓蒙思想が人々の共感を得て社会に広まり、やがて 1789 年になると、啓蒙思想家たちが著作の中で述べた思想を実際の政治や社会において実現すべく、新たに選ばれた若い議員たちが中心になってフランス革命を実行したのでした。ですから「啓蒙思想が考えたことをフランス革命が実現した」もしくは「啓蒙思想が原因となってフランス革命が導かれた」と言えるのだというわけです。

もちろん、こうした見方はある意味では正しいものです。ヴォルテール、モンテスキュー、ディドロ、ルソー、エルヴェシウス、ドルバック、といった一群の思想家たちは確かに実在しましたし、それぞれに影響力のある著作を発表しました。これらの著作は思想研究の面からも、また文学研究の面からも重要なものであって、こうした分野の学部・学科を持つ大学の図書館であれば、これらの著作をある程度は揃えているだろうと思います。今回の講義でも、まずこれらの思想家それぞれがどのような人たちで、どのような傾向もしくは特色を持っていたのかを重点的に紹介したいと思います。

しかし最近の思想史研究では、上に述べたような「啓蒙思想」の位置付けに疑問を呈する見方が現れるようになりました。フランスのロジェ・シャルチエやアメリカのロバート・ダーントン、キース・マイケル・ベイカーといった歴史家たちの見解です。これらも講義の中で紹介したいと思います。彼らの疑問は、簡単に要約してしまうならば、二つの問題に集約できます。ひとつは「啓蒙思想とはまとまった一つの思想運動だったのだろうか」という疑問であり、もうひとつは「啓蒙思想はストレートにフランス革命につながったのだろうか」という疑問です。第一の疑問について説明しますと、例えば

ルフラン・ド・ポンピニャンという詩人はいわゆる啓蒙思想家たちを批判したので、ヴォルテールから辛辣な批判を浴びました。この詩人は通常「反啓蒙思想派」ないしは「保守反動」と位置付けられています。しかし「啓蒙思想家」とされるJ.-J.ルソーもヴォルテールを批判し、ディドロとは喧嘩別れしました。ルソーとルフラン・ド・ポンピニャンはどこが違うのでしょうか。また「啓蒙思想家」は個人がそれぞれに持つ理性と自由を重視したとされますが、それでは啓蒙思想に批判的だった人々は理性や自由を重視しなかったのでしょうか。こうした点を調べてみると、「啓蒙思想家」とされる人々がすべて同じ特徴を持っているわけでもなければ、「反啓蒙思想家」とははっきり異なっていたというわけでもないことが明らかになるのです。そうしますと、改めて「啓蒙思想とはそもそも何だったのか」を問わなければなりません。講義では啓蒙思想家と論争をしたJ.-N.モローを紹介したいと思います。

第二の疑問について説明しますと、上に述べたダーントンは、革命家たちは啓蒙思想家に敵対的だったとしています。本稿の上に述べたヴォルテールなどは、ダーントンによれば啓蒙思想の第一世代であり、彼らは確かに既成秩序に批判的でした。しかしそれより二回りほど若いシュアールやモルレなどの第二世代になると、アカデミー・フランセーズの会員に選ばれたり、国王から年金をもらったりして、彼ら自身が既成秩序の中に入っていきます。革命を起こしたのは彼らよりさらに若い世代であって、革命家は既成秩序に安住するようになった第二世代の啓蒙思想家を打倒そうと努めたのでした。

「(第二世代の) 啓蒙思想家に敵対的だった」ことを「啓蒙思想に敵対的だった」とみなして構わないかどうかは疑問だと思いますが、少なくとも啓蒙思想とフランス革命の関係が従来考えられていたほどすっきりとストレートなものでないことは明らかでしょう。また啓蒙思想を考える際には、ここで述べた第二世代、さらには(革命を行なった) 第三世代に属する二流・三流の、現在では忘れられてしまった思想家たちにも目を配らなければならないことも明らかだと思います。大学図書館での集書においても、その辺りを意識していただければと思いますので、時間の許す限り、ここに述べた人々についても具体的に紹介したいと思っています。

参考文献

- 1) ロバート・ダーントン『革命前夜の地下出版』 関根・二宮訳 岩波書店
- 2) ロジェ・シャルチエ『フランス革命の文化的起源』 松浦義弘訳 岩波書店

東北大学貴重図書発掘

— 漱石、ゼッケル、ケーベル、チーテルマン文庫 —

小川知幸

(東北大学学術資源研究公開センター助教)

はじめに

「貴重図書」ということばがあります。たいていの大学図書館では、さまざまな理由から一般の図書とは別の利用規程を設けて、より厳格に管理している図書や資料がありますが、東北大学附属図書館ではこれを貴重図書と呼んでいます。現在、明示的に貴重図書とされているものは洋書では約 1,870 点あり、これにまだ目録化されていない 70 点あまりを加えると約 2,000 点。一般図書を含めた附属図書館（本館）の洋書の総数は 2015 年 3 月時点で 116 万 5,192 冊ですので、洋書総数に占める貴重図書の割合は約 0.0017 パーセント、つまり大雑把に言って、1 千冊に 1、2 冊程度しかありません。それでは貴重図書である要件とは何なのかというと、洋書の場合は 1600 年以前の刊行によるもの、あるいは名家の書き入れ等があるもの、などの規定がありますが、そのような明確な基準によって貴重図書に分類されたものはむしろ少ないようにおもわれます。

ところで、この貴重図書に相当する英単語は、Old and Rare Books であることはよくご承知のこととおもいます。英単語では、日本語で言う「貴重」という意味はなく、古刊本および希少本ということばに分解されてしまうのです。ただし、Old ということばには、もともと、「年月を経た」、「良いもの」という意味もあります。私は、2006 年頃から東北大学附属図書館の貴重図書等の保存修復事業に携わっていますが、その作業を進めるなかで、それぞれの図書（資料）には、それぞれの価値があるのではないかと考えはじめました。それは他に代えがたいもの、すなわちアイデンティティというほどの意味です。したがって、何が貴重図書に相当するか、これを決定する過程では、その図書がもつアイデンティティを見抜いていくことが重要になります。少し先回りして言うと、その図書の履歴、あるいは生活史といってもいいかもしれませんが、そうしたものを調べることになります。この作業のなかで「価値」が発見される。昨日までの一般図書がとつぜん貴重図書になることもあります。この講義のタイトルを「貴重図書発掘」

とした所以です。

以下では、これまで私が手がけたうちの4つの事例を選んでお話ししようとおもいます。

1. 漱石文庫 ― 保存修復のはじまり

漱石文庫とは、文字通り、文豪・夏目漱石の旧蔵書を中心とした文庫で、東北大学附属図書館が1943（昭和18）年から受け入れ、翌年に成立したものです。漱石の弟子であった小宮豊隆が当時図書館長を務めていたことが受け入れの背景にあります。詳しくは後のケーブル文庫の項目で説明します。漱石文庫には約1,650冊の洋書、約1,200冊の和漢書、また、自筆資料等の身辺資料が収められています。大きな特徴としては、蔵書のおよそ3割に漱石自身の書き込みがあることが指摘されています。「名家の書き入れ本」というわけです。ただし図書そのものとしてみると、洋書のうちの7割がいわゆるポケット版、あるいは6ペンス版といわれる廉価版であり、2000（平成12）年に飛ヶ谷美穂子さんが閲覧したときには、「もともと造りが安手のうえに愛読を重ねた結果、ついには出版時の状態がわからないほどボロボロになってしまったものもある」という感想を漏らしています（「漱石の愛読書」）。飛ヶ谷さんはこの「出版時」の部分に「オリジナル」というルビを振っています。しかし保存修復事業を始めるにあたって、漱石文庫におけるオリジナルとはいったい何なのかという問題に行き当たりました。

もちろん漱石文庫は稀覯書を集めたようなものではありません。現在も東北大学附属図書館の看板ともいえるきわめて人気の高い文庫ですが、その閲覧者は漱石の手にした痕跡のある蔵書を探しに来るのです。とすれば、漱石生前の状態がオリジナルである。漱石自身が蔵書をボロボロにしたのなら、それをそのまま残すのが保存修復のあり方ではないかという結論にいたりしました。とはいえ、どこまでが漱石のしわざなのか、それを確定するためにはさまざまな文献にあたり、また、当該図書の状態を探るしかありません。ひとつの事例としては、図書の背の部分に鼠のかじったとおもわれる痕がありました。漱石の死後、かつて書斎であった漱石山房に、蔵書は30年近く、ほとんど放置に近い状態にあったようです。芥川龍之介や小宮がそのようすを書き残しています。しかし、漱石はネコを飼っていたことも有名です。ネコの役割は鼠の駆除でもあった。こう言うと単純すぎるようですが、漱石生前に付けられた痕であった可能性が排除できない限り、この痕跡は、将来再現可能なものとして残すことにしました。

漱石文庫の保存修復においては、今後の保存に耐えうる新たな構造を付与することはできても、外観を変更することはできない。ここで考案した方針は、図書の修復というよりも絵画の修復に近いかもしれません。あくまで漱石が読んでいたときの状態にこそ、その図書のアイデンティティがあり、それが貴重であるという考え方です。

2. ケーベル文庫 ― 修復とバイオグラフィ

つぎに、ケーベル文庫の修復のお話をします。ラファエル・フォン・ケーベルは、漱石が私淑したことでも知られています。いわく「文科大学へ行って、ここで一番人格の高い教授は誰だと聞いたら、まずフォン・ケーベルと答えるだろう」（「ケーベル先生」）。漱石はケーベルの美学の授業も受けていて、その講義ノートが漱石文庫に収められています。ケーベルは東京大学との契約終了後ドイツに帰国しようとしたましたが、第一次大戦勃発のために果たせず、1923（大正12）年に横浜の寓居で死去しました。旧蔵書の大半は親交の深かった久保勉（まさる）が引き継いでいましたが、久保が東北大学に赴任していたとき小宮豊隆の説得により附属図書館に受け入れられ、1942（昭和17）年にケーベル文庫が成立しました。このケーベル旧蔵書受け入れが実績となり、漱石文庫の呼び水となったともいえます。当時の図書館では、ケーベル文庫と漱石文庫は、あたかも寄り添うように並べられていたそうです。

さて、ケーベル文庫の図書は、3.11の東日本大震災のときに大量に落下した蔵書のなかに多く混じっていました。とくに大きく破損したいくつかの図書を修復したさいに、それらがステープル綴じであったことが判明しました。鉄製のステープルの腐食により、綴じや支持体がダメージを受けていて、落下のはずみで破損にいたったのです。これらは要するに、いわゆるフランス装の図書を、ケーベルが日本国内で装丁（製本）させたものでした。簡便で質素な装丁を好むという点で漱石に通じる部分があったケーベルですが、どの本をいつ頃どこで購入し、どのように装丁し利用したかということが、震災での破損をきっかけにあらわになった図書の構造から判明した事例です。

3. ゼッケル文庫 ― 書物と音楽の交わる場所

少し趣向を変えて、図書のなかから楽譜が出てきた、というお話をします。エミール・ゼッケルという元ベルリン大学長でローマ法・教会法研究者の旧蔵書が附属図書館に収



蔵されています。2010（平成 22）年に、そのなかから 18 世紀の法学書を選んで修復したとき、羊皮紙の装丁の裏側にあった背貼りに、手書きの楽譜が使われていることを発見しました。18 世紀はバロック音楽の時代ということで、ヴィヴァルディの楽譜ではないかと期待されたのですが、その楽譜を読むと、コンチェルト・グロッソという形式であり、それよりは少し早い時代であったことがわかりました。そして、出版者の特定から、なぜ法学書から楽譜が出たのかということと、また、当時のイタリア（ナポリ）がペスト大禍の後の復興期にあり、その復興の気運のなかからバロックという新しい時代の音楽が生まれたということもわかってきました。こうして、旧蔵者のゼッケルでさえ知らなかった事実を知り、その図書に新しい価値を見出すことになったのです。

おわりに

本講義では、さらに、「チーテルマン文庫 — 100 年前の書簡」というお話もします。以上のように、それぞれの図書に固有の価値を見出すことで、私たちは、貴重図書を今まで以上に「増やす」ことができるはずです。そのことをみなさんにお伝えして、これから、ご自分の勤める図書館のなかで貴重図書を「発掘」していただくことを期待しています。

参考文献

- 小川知幸、『東北大学附属図書館本館所蔵 新訂貴重図書目録洋書篇』の刊行について、木這子，Vol. 29，No. 2，2004
- ，ゼッケルとその蔵書 — ゼッケル文庫目録作成にあたって —，東北大学附属図書館研究年報，31・32，1999
- ，漱石文庫の保存修復 A Restoration for the Books of SOSEKI-Collection，木這子，Vol. 31，No. 3，2006
- ，歴史資料のコンサベーション — 漱石文庫の保存と修復について —，東北大学総合学術博物館ニュースレター Omnividens，No. 36，2010
- ，書物と音楽の交わる場所 — musica e storia intrecciarsi in libro —，東北大学総合学術博物館ニュースレター Omnividens，No. 38，2011
- ，少しく無秩序のうちに秩序のある — ケーベル文庫とその保存修復について —，Tohoku University Library's Koeber Collection and its Conservation，東北大学附属図書館調査研究室年報，第 2 号，2013
- ，附属図書館にて発見されたエルンスト・チーテルマン宛て書簡 2 通について：翻刻と解説 — 2 Letters for Prof. Dr. Ernst Zitelmann in 1882 and 1910 —，東北大学附属図書館調査研究室年報，第 3 号，2015

*保存修復は株式会社 Conservation for Identity のご協力のもとにおこなわれています。

西洋古典資料の調査票について

岡本 幸治

(製本家・書籍修復家)

西洋古典資料は現代の本とは異なる点を多く持っている。印刷に用いられる紙は、麻(主として亜麻)のボロ(古着)を原料にした手漉き紙である。手漉き紙には様々な大きさの紙があり、紙の方向を変えながら折畳むことによって2紙葉のフォリオ判、4紙葉のクォート判、8紙葉のオクタボ判などの折丁が構成される。印刷は鋳造活字の組版による活版印刷であり、一冊分のテキストが一度に印刷されることは少ない。多くの場合、印刷の終えた組版をばらして残りのテキストを印刷する。印刷が終わるまでに紙が替わってしまう場合もある。校正や検閲などにより印刷が修正されてページが差し替えられる場合もある。印刷・出版と製本は別々に行われることが普通であって、出版時には正式な製本がされずに仮綴じの状態で出版され、購入者がそれぞれ製本を依頼する。同じ出版物であっても製本は異なったものになる。西洋古版本には、所蔵の履歴が色濃く形態に反映されることになる。タイトルが同じでも同一の版とは限らず、同一の版であっても製本などの形態が異なる。出版された当時の姿のままの場合がある。簡略な製本で余白を大きく断裁されてしまうこともあれば、豪華華麗な製本が施されページの余白がたっぷりと保持されている場合もある。製本時にメモのための白紙が付け加えられたり、蔵書票が貼付されたり、本紙にメモが書き込まれたりすることもある。さらに製本構造や装飾様式、使用される素材も多様である。

西洋古典資料の保存はこのような多様性を持った(製本された)本を対象として取り扱うことになる。どんな特徴を持った本がどのくらいあるのか、傷んでいる本がどれだけあってどんな傷み方をしているのかが具体的に分かると保存手段を考えやすくなる。これから傷みそうな本も予測できて、利用頻度も勘案しながら処置の緊急性についても理解できれば心強いものになる。このような情報を効率よく記録するための手段が調査票である。

西洋古典資料の調査票に必要なデータは、製本構造、使用される材料、両者の劣化状況であると思う。それらの項目について以下に考察する。

1. 製本構造

西洋古典資料には歴史的に特有で異なった製本構造があつて、それぞれが異なる力学的体系で成り立っている。現代の本とは構造や機能が大きく異なっており、取扱いには注意が必要である。製本構造の特徴は、主として表紙と中身の接続に現れており、さらに異なった綴じ方、見返し構造が用いられている。

1-1. 綴じの特徴

西洋古典資料の綴じの特徴は「綴じの支持体」でブロックをまとめていることである。折丁を中綴じする綴じ糸は折丁の末端で隣接する折丁に移動するがその時に糸どうしを絡めて結びを作る。しかし末端以外では糸が絡み合うことはなく、多数の折丁を1つのブロックにまとめられるのは「綴じの支持体」に糸を絡めて折丁を固定しているからである。綴じの支持体には、ロープ状の麻繊維やテープ状の革や羊皮紙・布などが用いられる。綴じ糸が「綴じ支持体」をくると一巻きしながら綴じる方法(背バンド綴じなど)と、「綴じ支持体」の外側を通過して綴じる方法(かがり綴じ、テープ綴じなど)とがある。19世紀以降の製本では、徐々に機械力で綴じる方法が採用されて、糸または針金で綴じた。綴じはすべて中綴じが基本であるが、平綴じが部分的または全面的に用いられる場合もある。

1-2. 表紙の接続

綴じの終わった本は「綴じ支持体」を使って表紙を接続した。折丁を綴じて背の丸みを出して「綴じ支持体」で表紙ボードを接続する方法を「とじつけ製本」と呼んでいる。表紙ボードではなく表装材を「綴じ支持体」で接続する方法を「リンプ製本」と呼んでいる。表紙ボードが用いられる場合と用いられない場合とがある。「綴じ支持体」を使わずに、本体(中身)とは別に表紙ボードと表装材で作った表紙を背貼布(寒冷紗)で接続する方法を「くるみ製本」と呼んでいる。それぞれの製本構造には複数のバリエーションがある。

1-3. 見返し

表紙と本(中身)との接続を内側から支えているのが「見返し」である。見返しは製本時に中身に付け加えられる紙葉である。その付け加え方によって「とじ見返し」「巻き見返し」「貼り見返し」の種類がある。「とじ見返し」は見返し用紙が独立した折丁になっていて製本時に綴じられる。「とじ見返し」にはい

くつかのバリエーションがある。「巻き見返し」は見返し用紙を最初と最後の折丁に巻きつけて綴じている。「貼り見返し」は 19 世紀以降の方法で見返し用紙を最初と最後の折丁のノドに貼り付けている。マーブル紙などの装飾紙を見返しとして用いる場合は、複合型の構造になる。

1-4. 背表紙

表紙を開いて本を読むという行為から発生する負荷は、背の柔軟性と大きく係わっている。しかし背表紙の構造と柔軟性にはあまり関連性がない。構造的には背表紙に芯材のあるものとないものがある。さらに芯材のある背表紙では、本の背と背表紙との間にすき間が出来る場合(穴あり)と出来ない場合(穴なし)がある。背表紙の構造とは別に柔軟な背と硬い背とがある。保存を目的とした調査票では芯材の有無にかかわらず「穴あり」か「穴なし」の区別と背の柔軟性をチェックすることで十分と言える。

2. 材料

製本に使われる材料にも注目すべきである。現在の姿を正しく記録するとともに、材料の特性に注目する必要がある。

2-1. 表紙の材料

表紙の芯材には木の板やボール紙が使われる。ボール紙にはバリエーションがある。芯材がまったく使われないこともある。

表装に使われる皮革には(タンニン)革、羊皮紙、トーイング革がある。革がボロボロになる化学的劣化現象は 19 世紀以降の(タンニン)革で起きている。羊皮紙は湿度の変化に敏感で波打ちや縮み現象が起きやすい。トーイング革は柔軟性を失ってくる。

製本用クロスは 1920 年代に開発された。木版プリントやマーブル紙、ペーストペーパーなどの装飾紙が製本に使われ始めたのは 17 世紀であるが表装材として用いられたのは 18 世紀末と考えられる。時代によってマーブル模様が変化する。表紙の箔押し装飾の様式やマーブル紙の模様は製本年代特定の役に立つ。

2-2. 綴じの材料

綴じの支持体に使われる材料は、製本が健全な状態のときには確認が難しい。綴じ糸の運針や見返し(効き紙)に現れる凹凸などから判断する。綴じ糸で留意

すべきは「針金綴じ」である。折丁奥の錆びの痕跡や磁石の利用などで判別できる。

2-3. 見返しの材料

見返しに使われている紙は製本年代の特定に役立つ。碎木パルプは 1860 年以降、化学パルプは 1880 年以降と考えられている。簀目のない手漉き紙は 18 世紀中ごろ以降に生産された。透かし文様があれば、文献やデータベースから紙の年代を調べられる。マーブル紙は模様や色などから年代を推定できる。マーブル紙などの装飾紙も見返しに使われた。

3. 劣化

詳細な記述が望ましいが煩雑でもある。目的や能力によってさまざまな記述法が可能である。構造の劣化と材料の劣化について記録する。

3-1. 表紙の劣化

表紙ジョイントの傷み(表紙の欠損、表紙の分離、ジョイントの傷みなど)、背表紙の傷み(背表紙の欠損、背表紙の分離、ジョイントの傷みなど)、材料の傷み(表装材の劣化、破損、欠損、損傷など)。

3-2. 綴じの劣化

綴じ支持体の切断による表紙の分離・欠損。綴じ支持体と綴じ糸の切断による綴じの分解(ブロックに分割、折丁単位でバラバラ)。綴じ糸の切断によるページの分離。切断していないが綴じがゆるんでいる場合もある。針金の錆びによるページの分離。

3-3. 見返しの劣化

ノド破損は大きな構造的劣化で表紙の分離に発展する可能性がある。19 世紀以降に製本された場合に見返し用紙が酸性化する可能性がある。

調査票によって製本構造や材料などの形態的データと傷みのデータを数量的に把握することができる。データを分析することによって潜在的な劣化の可能性を読み取ることが可能である。表紙の分離、綴じの傷み、見返しノド破損のような重度の劣化は、経年による現象というよりは利用による負荷を適切に解消出来ない製本構造上の理由があるものと考ええる。

(資料図版を当日配布します。)

思想史研究の方法

— 18 世紀スコットランド啓蒙研究を例に —

福田 名津子

(一橋大学附属図書館研究開発室)

近年、デジタル技術の発展を目の前に、人文・社会科学系研究者たちのなかで大きな期待と戸惑いが交互に押し寄せ、研究手法の模索が続いている。本講義では、思想史研究者がデジタル技術とどう向き合い研究を進めているか、その一例を示す。講義は2部構成を取り、前半で思想史という学問を概観し、後半で主題を絞り、スコットランド啓蒙研究の事例報告をする。

1. 思想史という学問

1-1. 「思想史」因数分解

まず、「思想史とは何か」「思想史研究者はどういう方法で何を研究しているのか」という素朴な疑問に立ち戻り、この学問を再考する。「思想史」を因数分解すると「思想の歴史」となり、これは人間の思想の歴史、人間の頭のなかで起こっている事柄の歴史を扱う学問であると分かる。人間の頭の「なか」で起こっている事柄はしかし自己完結せず、「そと」と関わりを持ち続ける。人間は周囲の環境（外部・他者）から影響を受けて思想を形成すると同時にその環境にも影響を与えるため、思想はテキストとコンテキストの相互作用を通じ語られる。

1-2. 思想史研究者の条件

思想史研究者の条件としておそらく最初に挙げられるのは、語学力である。人文・社会科学系学問で言語を重視しない学問はない点を考慮しても、思想史で語学力が強調される度合いは高い。その理由として第1に、原典主義を貫けば多言語・古典言語は避けて通れない。たとえば18世紀ヨーロッパの知識人の多くはラテン語に精通しているため、思想的系譜を調べるならばラテン語の知識が必要となる。また彼らは国境を越えて交流し関係を築いていたことから、思想的ネットワークを調べるならば多言語の知識が必要となる。

第2に、その時代・集団・個人に特有の語彙を理解し、文脈によって変化する語義を適切に判断する能力が要る。英語圏が対象であれば、とくに研究始めのころは **Oxford English Dictionary** を傍らに置き、キーワードは丁寧に調べるよう習慣づける。たとえば18世紀で **philosophy** は現代的な意味での哲学でなく「学問・知識」を意味すること、**history** は歴史というほかに「記述」という意味もあり、この場合に時間軸が含まれていないことは、私たちの一般常識を超えている。辞書で解決できる場合はまだよいが、個人特有の定義・語彙のある場合はさらなる注意を要する。辞書にはない言葉の用法を見極めていく作業は、ときに直観的ですからある。外国語に対しても、母国語に劣らない言語感覚と理解能力が求められている。

1-3. 「思想史」の方法

思想史研究の方法には4つあり、各要素をバランスよく考慮に入れる必要がある。まず、内在的・外在的という考え方がある。内在的アプローチでは、研究対象の（言葉で語られた）考えに着目する。本人がテキストを残している場合はそれを精読し、テキストが残っていない場合は別の方法で研究対象の考えを浮かび上がらせることになる。対する外在的アプローチでは、研究対象の置かれていた時代的・社会的文脈に着目する。人間の思想は常に外部と影響しあっているため、この要素も軽視できない。

次に通時的・共時的という考え方がある。通時的アプローチでは、思想の系譜、歴史的影響関係に着目する。私たちが過去の書物を読み影響を受けることから分かるように、思想には縦糸が織り込まれている。思想は必ずしも単線的に発展するものでないが、過去と断絶して進むことはあり得ない。対する共時的アプローチでは、同時代の思想のネットワークに着目する。私たちが知人と付き合うなかで影響を与え合うことから分かるように、思想には横糸が織り込まれている。ある地域・階層・集団のなかで通じる常識的な考え、そこに共通する考え方には傾向がある。

筆者は、18世紀啓蒙思想に見られる「古代と近代」「未開と文明」「進歩と墮落」「富と徳」といった対立軸に惹かれ、最終的にスコットランド啓蒙を研究テーマに選んだ。集合的思想を捉えるにはまず誰か個人の目を借りて接近し、徐々に複眼的にしていく方法が一般的である。いくらか概説書を読み、文明社会批判で知られるアダム・ファergusン（1723-1816）を研究対象とした。内在的アプローチとして、ファergusン本人のテキスト（1次文献）が残っているので、これを読むことを最優先した。外在的ないし通時的アプローチとして、スコットランド啓蒙関係の2次文献、まずは概説書から読み始めた。共時的アプローチとして、2次文献の他、ファergusン本人と同時代人の著作（1次文献）を読んだ。

1-4. デジタル・ヒューマニティーズ最前線

デジタル・ヒューマニティーズとは、デジタル技術を活用することで拓けてきた人文学研究の新しい地平である。資料を電子化するのは第一歩だが、それでは紙資料と大差ない用途で終わってしまう。デジタルが本領を発揮するのはコンピュータで処理できるデータ形式が整って以降であり、Optical Character Recognition や Handwritten Text Recognition によってテキストを認識したり、マークアップ言語化したり、アノテーションを追加することで、人文学研究の新しい可能性が拓けている。英語圏の事例でいえば、Early English Books Online, Eighteenth Century Collections Online, The Making of the Modern World といった古典籍のフルテキスト・データベースで OCR は常識となっており、著者やタイトルといったメタデータの検索のほか、全文検索も可能となっている。また、Early English Books Online は収録タイトルの約 20% をテキスト化しウェブ上で無料公開している。Bentham Project は世界規模でジェレミー・ベンサムの手稿を共同翻刻している。

2. スコットランド啓蒙研究

2-1. 文明社会の鍵概念：商業的アート

後半では、18 世紀スコットランド啓蒙研究を例に、デジタル・ヒューマニティーズ的手法を用いた研究成果を紹介し、利点と問題点を検討する。

筆者は大学院入学後本格的にスコットランド啓蒙研究に着手し、博士論文でアダム・ファergusンの文明社会像を明らかにした。彼は文明社会の特徴を「商業的アート」commercial arts と「政治的アート」political arts の発達に見ているのだが、ファergusンの定義する商業的アートは通常想定されるよりずっと広い意味を持っている。彼によれば、商業的アートは商業社会に固有でもなければ商業と同義でもない。それは採取・生産・交換の概念とも含み、いわば「生活に要するモノの獲得に関するアート」全般をいう。つまり「商業的アート」の一部分として「商業」が存在し、商業は「狭義の商業的アート」と見なすこともできる。

「商業的アート」はファergusンの文明社会像を理解するのに不可欠な鍵概念であるが、彼の定義は必ずしも一般的に思われない。比較のため同時代人たちの定義・用法を調査したいと考えたところ、筆者の読書経験を振り返りこれに思い当たらなかった。そこでフルテキスト・データベースを利用し、全文検索をかけて調査することにした。こうした調査方法はデジタル・ヒューマニティーズの恩恵にあずかっている。

2-2. デジタル・ヒューマニティーズ的手法を用いた調査

ファergusンの「商業的アート」に特殊性が認められるのかどうか判断するため、The

Making of the Modern World を用い、1751～1800 年にわたり“commercial art” “commercial arts”の 2 パターンで全文検索し、用法を調査した。調査記録として、①書誌情報、②登場回数、③登場ページ、④使用例（フレーズ）、⑤用法（意味）、⑥付近の語句といったメタデータをエクセルに入力した。1751 年から 1800 年の 50 年間で、commercial art(s) は、42 冊 249 回、ファーガソンの用例を除くと 83 回で、いずれも「貿易」「商業」と同義であり、彼の用法と重なるものは見つからなかった。

2-3. 全文検索機能を用いた研究手法の利点と問題点

全文検索機能を用いた研究手法の利点は、ひとりの人間が可能な読書量・記憶量を超えて関連資料が見つかることにある。ただし、大量の検索結果から選別する必要性が残る。また、登場回数について、人間が目視して数えるより正確な数値が出る。ただし、元データを正確に処理できた場合に限られる。

全文検索機能を用いた研究手法の技術的問題点は、第 1 に OCR の精度にある。データベースに収録されているフルテキストは古典籍のため、汚れや印刷不鮮明といったノイズが多く、ときに OCR が正常に機能しない。この場合は一定数の検索漏れが出る。第 2 に、検索によって冊数は自動的に数えられても、ヒット回数は自分で数えるしかない。第 3 に、全文検索機能が有効なのはオンライン時のみで、ダウンロードした PDF ファイルに対し検索をかけることはできない。

全文検索機能を用いた研究手法の人的問題点は、膨大な検索結果から適切に選別できるかということ、膨大な検索結果を適切な文脈で読み取れるかということにある。後者の問題点に関し、用法の判断に有用と見なした語句を比較したところ、ファーガソンの用法と一般的用法で決定的な差異は見いだせなかった。定義を比べるならまだしも、少量の文脈で用法を判断するのは困難であり、ファーガソンの定義では「商業的アート」のなかに「商業」が存在する入れ子構造のため両者の判別はなおさら困難であった。本人が広義と狭義の使い分けに意識的でない場合も考えられる。

全文検索機能を用いた研究手法の利点は大きいといえる。玉石混交であれ、今まで見つからなかったものが見つかるのは事実である。技術的問題は、時間による解決が期待できる。単純で膨大・正確な作業はコンピュータの得意分野のため、コンピュータは全文検索に向いている。重要なのは、コンピュータの処理できるデータ形式が整っていることであり、ここに改善・発展の余地がある。人的問題は、しかし課題が残る。技術的問題に変換できるものがあつたとしても部分的にとどまり、その信頼度も問われることになる。

2-4. デジタル技術とどう付き合うか

デジタル技術が発達し、研究上の利便性が格段に上がったのは事実である。一方で、デジタル・ヒューマニティーズ的手法、人間とコンピュータの最適な分業体制は模索中のため、それと知らずひどい遠回りをしている可能性も多分にある。この新しい技術を「なかったこと」として無視はできない状況で、研究者たちはデジタルとの距離を近くとるか遠くとるか、方法論に立ち戻っている。

西洋古典資料の目録作成

床井 啓太郎

(一橋大学社会科学古典資料センター専門助手)

1. はじめに

この講義では、主に 19 世紀より以前に西洋で出版された古典資料の目録作成について、特に国立情報学研究所の総合目録データベースへの登録作業の実際に即して、注意点を考えていきたいと思います。目録作成は、AACR2（英米目録規則第 2 版）における初期刊本に関する規程 (2.12-2.18) の拡張規則である *Bibliographic description of rare books*. Washington, D.C., Library of Congress, 1981（以下 BDRB）と、その邦訳『稀観書の書誌記述』国立、一橋大学社会科学古典資料センター, 1986（一橋大学社会科学古典資料センター Study Series, no. 11）に基づいて行います。また、BDRB の最新版である *Descriptive cataloging of rare materials (books)*. Washington, D.C., Library of Congress, 2007（DCRM (B)）の変更点についてもできる限り触れることにします。

2. なぜ特別の目録規則を使用するのか

古典資料でも一般書でも、目録作成において注意すべき点に大きな違いはありません。①情報源から必要な情報を正確に読み取り、②読みとった情報をもとに正しく書誌の同定を行い、③適用する目録規則に基づいて正確に書誌の記述を行う、という基本的な作業が常に重要です。ただし、古い本の場合には、現代の本との出版事情の違いを意識して書誌作成にあたる必要があります。

一般書と「古典資料」の区分は明確に定まっているわけではありません。区分の方法あるいは基準とする年代は館ごとに異なると思いますが、年代で区分する場合は概ね 18 世紀後半から 19 世紀に基準点を置いて、その前後で扱いを変えるケースが多いようです。この 18 世紀後半から 19 世紀という時代は、出版に関連する技術が大きく変容した時代でもあります。この時代に組版、印刷、製本、製紙など多くの分野で技術革新および機械化が進み、現在と同様に「同一の出版物を大量に生産する」ことが可能になっていきました。

現在われわれが総合目録データベースにおいて採用している所蔵管理の方法は、多数

のコピーの同一性を維持することが可能な、現代の出版物の特性を前提に成り立っています。一定の事項（タイトル、出版年、版次...）が一致する出版物は、一定の同一性を持っているとみなすことができるからこそ、限られた書誌事項のポイントが一致している資料を同一物であるとみなして、一つの書誌の下に管理することが可能なわけです。これに対して、同一物を機械的に大量生産する技術が確立する以前に出版された本の様態は、もっと不安定なものでした。この時代の資料には、タイトル、出版年、版次などの基本的な要素が一致していても、判型や折丁の構成が異なっていたり、差し替え紙葉が含まれていたり、もっと細かい組版上の差異が存在するようなケースが数多く見られます。こうした資料については、極端に言えば同一のものは二つと存在しないという前提に立って、コピー間の差異を明確に認識できる形で緻密に書誌を記述することが必要になります。『稀観書の書誌記述』はそうした詳細な書誌記述を行うのに適した目録規則とすることができます。

『稀観書の書誌記述』では、タイトルや出版者、製作者の記録などについて、古典資料独特の様態に応じて、省略や置き換えをせずにあるがままを記述することが可能です。その他、基本的に AACR2 に準じる内容であることから、目録作成に AACR2 を使用している館であれば、導入が容易な点もメリットのひとつです。ただし、AACR2 と細部で異なる点や、相反する規定もありますので、これに基づいて書誌を作成する場合には注意が必要です。講義では、実際の資料を題材に古典資料の目録作成のポイントを確認していきます。

3. 目録作成

ここでは、『稀観書の書誌記述』に基づいて目録を作成する際の注意点を、AACR2 の規定と比較しつつ、書誌事項ごとに簡単にまとめておきます。（**反転**は『稀観書の書誌記述』の規程）

<TR>

- ・レイアウトから一見してタイトル、著者名を見て取ることができる場合が多い現代の出版物と異なり、古典資料では、しばしば多くの情報が切れ目なく連続してタイトルページに並べられた。また、「著者～の...」などの形で、タイトルに著者名が組み込まれる形式もしばしば見られた。

“I. A. Comenii～”＝「コメニウスの～」のように、著者名が属格で書名に掛かっている場合、文法的に分離できないので、全体をタイトルとして記録する。

- ・ロング s と f を間違わないように気を付ける。横棒が右に突き抜けているのが f。
- ・“I/J”、“U/V/W”の転記に注意する。（**OH**）
- ・本タイトルは一般に短縮しない。例外として、本タイトルが極めて長く、かつ情報の

本質を損なうことなく短縮できる場合は、重要でない語または句を省略できる。(1B8.)

(AACR2 1.1B4. 長い本タイトルは、不可欠な情報を損なわない場合に限って、縮約する。)

- ・責任表示は一般にすべてを記録する。個人または団体の名が非常に多数であるときは、4人以上は省略し、3人目までを記録する。(1G5.)

(AACR2 1.1F5. 単一の責任表示中に4人以上の個人または団体の名称が含まれる場合は) ...最初の一人もしくは一つだけを記載し、他はすべて省略する。)

- ・タイトルページ、その裏面および先行部分 (preliminaries)、または奥付にある責任表示を、そこに表示されている形で責任表示として記録する。責任表示をタイトルページ以外からとった場合は、それを角がっこにに入れて、その情報源を注記に示す。(1G1.)

(AACR2 1.1F1. 主情報源以外の情報源から得た責任表示は、角がっこに入れる。)

- ・責任表示がタイトルページ、その裏面および先行部分 (preliminaries)、または奥付以外の情報源中にあるとき、または外からの情報源からとった場合は注記エリアにそのことを記録する。(1G2.) →責任表示エリアには記録しない

<ED>

- ・版表示、またはその一部分をタイトルページ以外からとったときは、その情報源を注記エリアに示す。(2A2.)
- ・別刷 (issues) または刷 (impressions) に関連する表示は、その出版物が以前の版と変わっていても版表示として記載することができる。(2B2.)
(コーディングマニュアル 4.2.2H1 ...版の表示があっても、それが単に「刷」を意味するようなものであるならば、その情報はEDフィールドに記録してはならない。)

<PUB>

- ・15-16世紀の刊本では、写本時代の慣習から出版者・印刷者情報が奥付に記載されている場合がある。出版などのエリアのどの部分でもそれをタイトルページ以外からとったならば、その情報源を注記エリアで示す。(4A2.)
- ・出版者などの名は、完全な正字法形式で、かつ文法的事実（先行する必要な語句とともに）によって転記する。(4C2.)
(AACR2 1.4D2. 出版者名、頒布者名などは...最も簡潔な形で記載する。)
- ・出版者に関連する表示が二つ以上あるときは、一般に、表示されている順序ですべてを記録する。(4C6.)
(コーディングマニュアル 2.2.3F1 出版地、出版者等が複数表示されている場合は、顕著なもの、最初のものの順で、記録する。...2番目以降は「選択」である。)
- ・出版地の名の前にある前置詞は転記中に含める。(4B2.)
(AACR2 1.4B4. 土地、個人、団体の名称は、付随している前置詞を省略してそのま

ま記載する。)

- ・2つ以上の場所が示されていて、それが同等の重要性をもち、かつその場所がすべて同じ出版者、頒布者または印刷者に関連しているときは、そのすべてを記録する。

(4B6.)

(AACR2 1.4C5. 出版者、頒布者などの事務所が2箇所以上にあり、それらの地名が記述対象に表示されている場合は、最初に出ている地名を常に記載する。...その他のすべての地名は省略する。)

- ・出版地が略語で表示されている場合は、その表示のまま記録して、略語でない形を付記。

Lugd. Batav. = Lugdunum Batauorum = Leiden

*PUB: Lvgd. Batav. [Leiden]

- ・『稀観書の書誌記述』においては、印刷者の名前や場所は、出版者・頒布者のそれと同等の位置付けが与えられている。印刷社の名がタイトルページに表示されているときは、別に出版者表示があるなしに関わらず、記録する。(4C2.)

(AACR2 1.4G1. 出版者名が不明の場合は...製作地および製作者名を記載する。)

- ・年を示すローマ数字を、それが誤りであったりミスプリントでないかぎりアラビア数字にかえる。(4D1.)

ローマ数字の表記：M=1000, CIƆ=1000, D=500, ID=500, C=100, L=50, X=10, V=5

*CIƆ ID C X L=1640

<PHYS>

- ・1800年以前の出版物については、版型を決定できるときは必ずそれを付記する。(5D1.)

*(8vo)=8折版

- ・印刷のない丁またはページ、広告類も数量の表示に含める。広告類を記録した場合は、必ず注記でそれを示す。(5B1.)

(AACR2 2.5B3. なくてもよいもの(広告、白紙ページなど)で番号づけのない部分は無視する。)

<VT>

- ・<TR>の記述は、“I/J”、“U/V/W”の転記により資料の表示形と異なるため、VT:TTに転記する前の表示形をそのまま記述し、アクセスポイントを作成する。

<NOTE>

- ・その著作の書誌的来歴について注記する。(7C7.)

*NOTE: The first of the Elzevir editions of the Janua

- ・色刷りが重要な特質を備えていれば注記する。インキュナブラの色刷りは必ず注記する。(7C10.)

*NOTE: Title in red and black

- ・挿図のより完全な細目を記載する。(7C10.)

*NOTE: Title vignette (printer's device with motto "Non Solus")

- ページ付けの誤りを注記。

*NOTE : Errors in paging: 207 numbered 205 (2nd group)